

奈良県^{ごせ}御所市

史跡 金剛山 IV

—納骨堂設置に伴う発掘調査—

平成28年(2016年)1月
御所市教育委員会

例 言

- 1 本書は、納骨堂の設置を目的とした工事に伴う事前調査として、金剛山転法輪寺の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、史跡金剛山の範囲内（御所市高天 472 番）における第 4 次発掘調査報告書である。
- 2 調査の体制等は次の通りである。

調査主体	御所市教育委員会	調査担当	御所市教育委員会 文化財課技術職員 金澤雄太
調査期間	平成 27 年 10 月 7 日	調査面積	9.97㎡
- 3 現地での写真撮影、および遺物の撮影は金澤が行った。
- 4 本書の執筆・編集は金澤が行った。
- 5 本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。
- 6 現地調査及び本書刊行にかかる費用は、金剛山転法輪寺がすべて負担した。関係各位にご理解、ご協力いただいたことを記し、深謝いたします。

目 次

例言

1. 位置と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 既往の調査と調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
3. 各トレンチの調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
4. 遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
5. 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

参考文献

図版

挿図 目次

- | | | | |
|-----|-----------------|----------|----|
| 図 1 | 史跡金剛山の位置 | ・・・・・・・・ | 1 |
| 図 2 | 金剛山の位置 | ・・・・・・・・ | 2 |
| 図 3 | 周辺の主要遺跡分布図 | ・・・・・・・・ | 4 |
| 図 4 | 史跡金剛山の範囲と調査地位置図 | ・・・・ | 6 |
| 図 5 | トレンチ配置図 | ・・・・・・・・ | 8 |
| 図 6 | 1 トレンチ平面図・土層断面図 | ・・・・ | 9 |
| 図 7 | 2 トレンチ土層断面図 | ・・・・ | 9 |
| 図 8 | 寛永通寶 | ・・・・・・・・ | 10 |

図版 目次

- | | | |
|------|---|-----------------|
| 図版 1 | 1 | 十三重塔撤去前（東から） |
| | 2 | 同（南東から） |
| 図版 2 | 1 | 1 トレンチ掘削前（北東から） |
| | 2 | 1 トレンチ全景（北東から） |
| | 3 | 同（北から） |
| | 4 | 2 トレンチ掘削前（北西から） |
| | 5 | 2 トレンチ全景（北から） |
| | 6 | 同（南から） |

1. 位置と周辺の遺跡

(1) 位置 (図1・2)

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km² の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

さて、今次調査地の金剛山山頂付近は、昭和9年3月13日付文部省告示第90号で、史跡金剛山として国指定史跡に指定された。その指定理由は、ここに役小角が開いたとされる転法輪寺が存在し、修験道の道場としても著名であったことや、楠木正成が千早城の詰城として築いたという国見城が存在すると考えられたことが挙げられる。

しかしこのことだけではなく、元来、古代に葛城山と呼ばれる山々は、現在の二上山・葛城山・金剛山の総称で、最も高くそびえるのがこの金剛山であり、金剛山は、日本古代史上においても重要な位置を占めている。

例えば、日本書紀や古事記には、葛城山に関する記述も散見される。『日本書紀』雄略天皇四年春二月条には、雄略天皇が葛城山に狩りに出かけその地で一言主神に邂逅する説話が載せられる。また、翌五年春二月条に、雄略天皇が再び葛城山で狩りを行った際には、霊鳥や噴猪が現れ、雄略天皇がこの猪を踏殺するという、天皇の勇猛な姿が描かれている。また、齐明天皇元年夏五月庚午朔条には、「空中に龍に乗れる者あり。貌唐人に似たり。青き油笠をきて、葛城の嶺より馳せて膽駒山に隠る」との神仙談がある。天武天皇九年二月辛未条には、「人ありて云う。鹿角を葛城山に得ると。その角本は二枝にして、末は合して穴あり。穴の上に毛あり。穴の長一寸。則ち異しをもってこれを獻ず。蓋し麟の角か」とある。これらのように、『日本書紀』には、葛城山はいくつもの奇瑞とともに描かれており、古代以来、この山に対しては、幽趣多いイメージが抱かれていたことが窺われる。



図1 史跡金剛山の位置

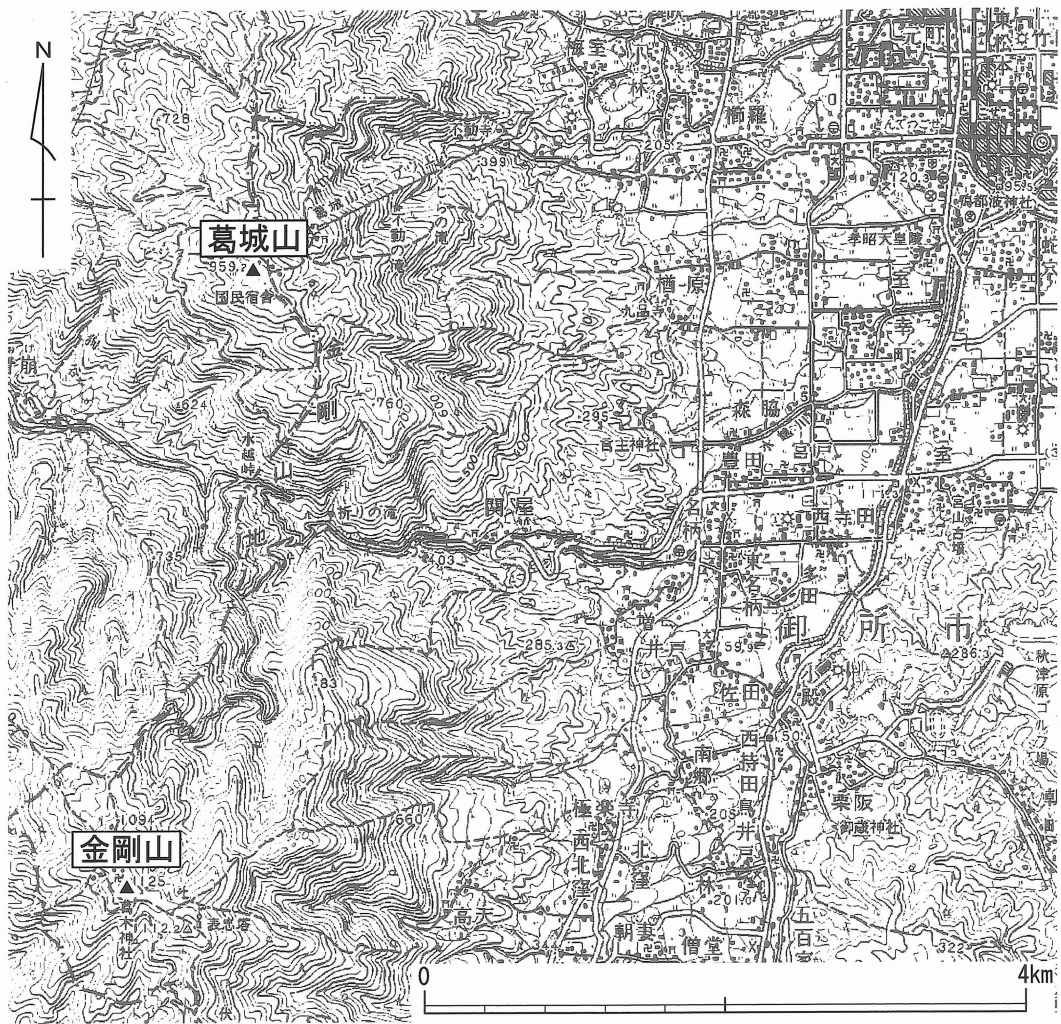


図2 金剛山の位置

(2) 周辺の遺跡 (図3)

御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居や土壇墓、晩期の平地式住居や水場遺構、土器棺墓群（本村 2009、岡田編 2013、木許・西村編 2015）、玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されており（御所市教育委員会 2010）、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、前者で半裁柱、後者で漆塗糸玉といった北陸地域でみられる遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉（廣岡・十文字 2005）、南郷遺跡地藏谷地区では中期末～後期初頭の土器が多く出土しており（坂編 2000）、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の

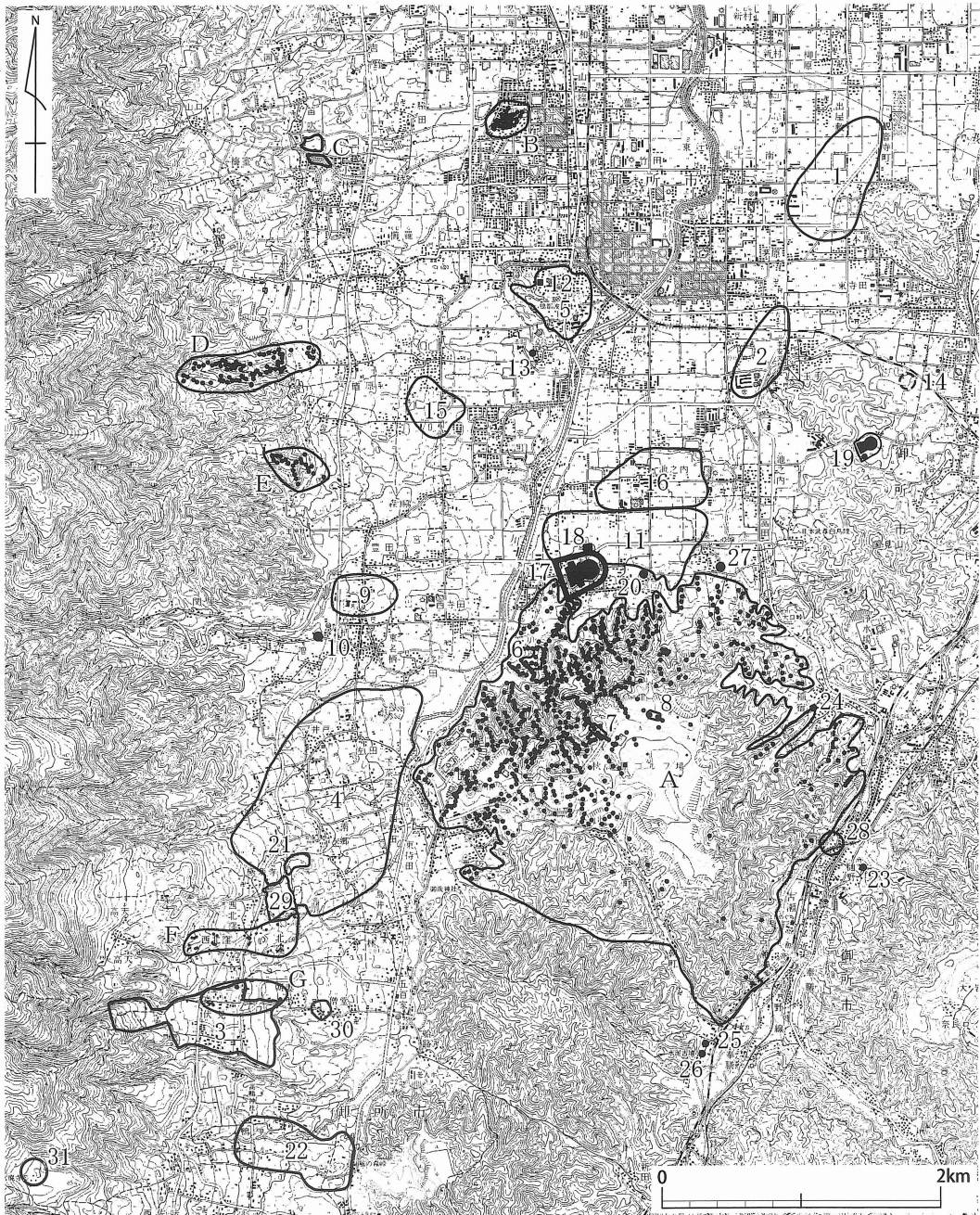
出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田 1997）。

弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる。（木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか）。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相が（鈴木編 2014）、秋津・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林が検出され生産域の様相が、それぞれ明らかとなっている（松岡 2011、岡田・松岡 2012、本村・中野 2013、岡田・絹島・中東 2013、岡田・中野 2015、岡田・木村 2015、絹島 2015）。後者については、全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約 20 m の小規模な方墳ながら、4 面の三角縁神獸鏡や方形板革綴短甲、漆塗靴といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となろう。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、楯原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津・中西遺跡から前期前半の方形区画施設や独立棟持柱をもつものを含む多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など、重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長 238 m を誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 m の前方後円墳である掖上鐘子塚古墳が築造されるが（楠本編 1978 ほか）、その立地が曾我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 m の円墳であるみやす塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。



1. 観音寺本馬遺跡 2. 玉手遺跡 3. 伏見遺跡 4. 南郷遺跡 5. 鴨都波遺跡 6. 巨勢山境谷遺跡 7. 巨勢山中谷遺跡
 8. 巨勢山八伏遺跡 9. 名柄遺跡 10. 名柄銅鐸・銅鏡出土地 11. 中西遺跡 12. 鴨都波1号墳 13. 西浦古墳
 14. オサカケ古墳 15. 楡原遺跡 16. 秋津遺跡 17. 室宮山古墳 18. ネコ塚古墳 19. 掖上籬子塚古墳 20. みやす塚古墳
 21. 極楽寺ヒビキ遺跡 22. 鴨神遺跡 23. 権現堂古墳 24. 新宮山古墳 25. 水泥北古墳 26. 水泥南古墳
 27. 條ウル神古墳 28. 巨勢寺 29. 二光寺廃寺 30. 朝妻廃寺 31. 高宮廃寺跡
- A. 巨勢山古墳群 B. 石光山古墳群 C. 小林古墳群 D. 石川古墳群 E. 吐田平古墳群 F. 北窪古墳群
G. ドンド垣内古墳群

図3 周辺の主要遺跡分布図

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう(坂編 1996 ほか)。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳の被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる(北中編 2007)。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が(藤田 1991)、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている(近江編 1993)。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳(佐藤 1916、河上 2001)、新宮山古墳(奈良県教育委員会 1980 ほか)、水泥北古墳、水泥石南古墳(網干 1961b ほか)があげられ、高取町域の市尾墓山古墳、市尾宮塚古墳なども含めて巨勢氏との関連が考えられる。地理的にはやや離れるが、巨大な横穴式石室をもつ條ウル神古墳についても、近年の調査で墳長 70 m 前後の前方後円墳であることが確実視できるようになった。石室の型式が巨勢谷のものと類似しており、その破格の規模とともに注目される(御所市教育委員会編 2003、金澤 2015)。

群集墳に関しては、総数 800 基を超える巨勢山古墳群(藤田編 1987)や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群(河上ほか編 1976)、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群(藤田 1987)や石川古墳群(白石 1974)、吐田平古墳群(網干 1961a)、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群(末永 1932、廣岡 2002 ほか)やドンド垣内古墳群(十文字編 2007 ほか)などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴式住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していることがわかる(藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか)。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが(河上・木下編 2004)、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺(廣岡 2006)では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の埴輪や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺(前園ほか 1978)、高宮廃寺(松田ほか 1993)の瓦と同範のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

2. 既往の調査と調査の経過

(1) 既往の調査 (図4)

史跡金剛山における発掘調査は、携帯電話の基地局設置をその主要因として今まで3次にわたり行われてきた。第1次調査は平成19年4月(木許2007)、第2次調査は平成22年9月(木許2011)、第3次調査は平成27年4~5月(木許2015)に行われているが、今までに確実な遺構は確認されていない。出土遺物も、攪乱土中から中世の土師器などが少量出土するのみであり、金剛山頂における中世以前の人々の活動について、考古学的な見知は未だに得られていないといえる。

(2) 調査にいたる経緯

平成27年6月までに、御所市高天472番に所在する金剛山転法輪寺は、国指定史跡金剛山の範囲内にあたる同寺境内地において、既存の十三重塔がある地点の地下に鉄筋コンクリート造の納

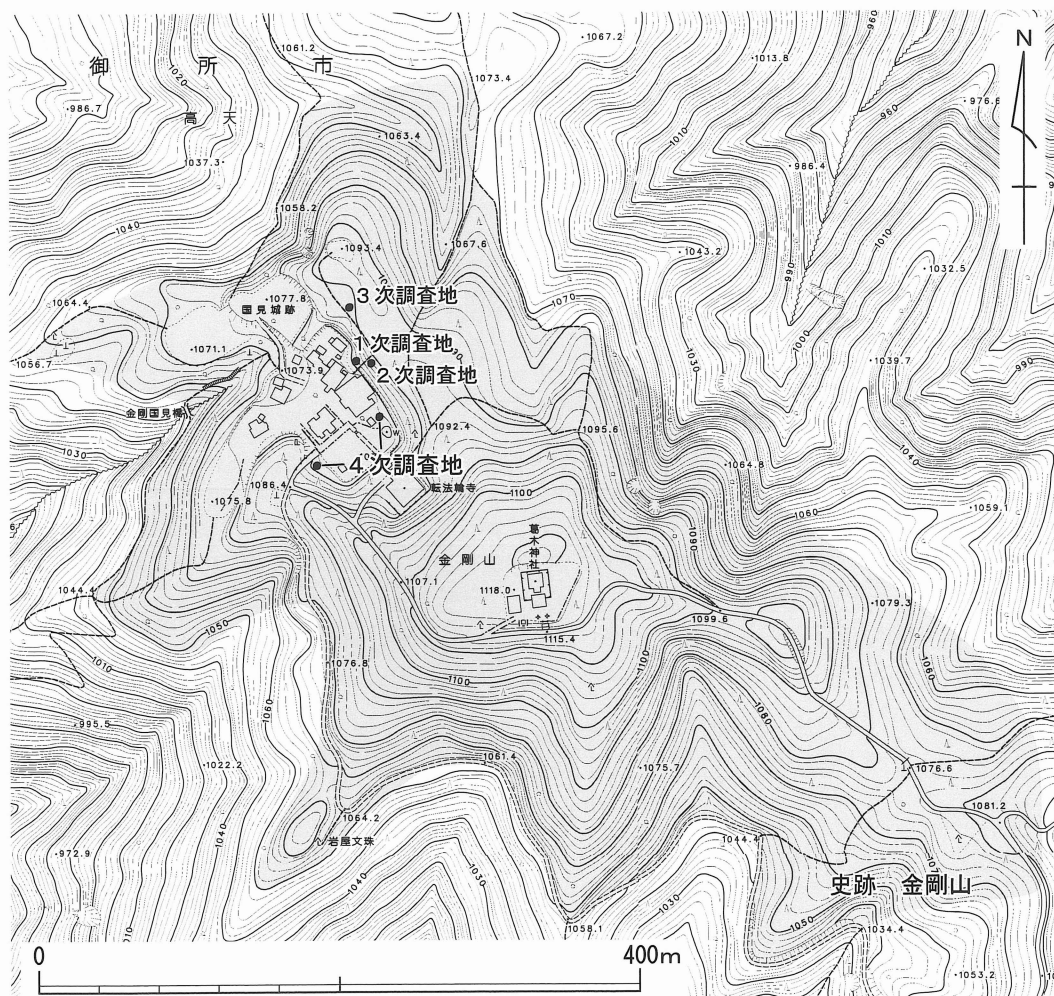


図4 史跡金剛山の範囲と調査地位置図

骨堂設置を計画した。この計画では、史跡指定範囲内での土木工事を伴うため、当市教育委員会は、事業者と協議して史跡指定範囲外での設置を検討するように指導した。しかし、信仰上の理由などから、当該地以外への設置は難しいとの結論であった。

納骨堂の設置自体は所有者である宗教法人の活動にかなったものであるもので、当市教育委員会は、掘削面積を最小限に留め、現状の景観を極力変更しない工事計画について指導を行った。

こうして、同寺は、文化庁長官に対して、平成27年6月15日付で史跡の「現状変更等許可申請書」を提出した。当該現状変更の内容は、現状の十三重塔を一旦他所に移動させてから、その箇所において一辺3.1m、深さ3.0mの掘削を行い、納骨堂を設置後、移動させた十三重塔を元の位置に戻すものである。十三重塔の一時移動については、宗教上の理由により、横倒しにできないため、仮移設のための掘削が小規模であるが必要となる。この内容は、工事終了後の景観が大きく変化しないものといえる。当市教育委員会はこれを受け、平成27年6月15日付で奈良県教育委員会に進達した。

対して、文化庁から平成27年7月17日付で「史跡金剛山の現状変更（納骨堂設置）について（通知）」があり、条件付許可という扱いになった。その条件とは、1. 工事の着手は御所市教育委員会による発掘調査の終了後とすること。2. 発掘調査の結果、重要な遺構などが検出された場合は、設計変更等により、その保存を図ること。以上の2点であった。

当市教育委員会は、この通知を受けて、直ちに発掘調査に係る体制を整えた。具体的には、事業者と発掘調査に関する受託契約を締結する一方で、調査の時期や調査員の配置に関する検討等を行いつつ、平成27年10月中に発掘調査を実施する方向で事業者との協議を進めた。

現地調査の前段として、十三重塔の解体作業が行われたが、基壇及び基礎部の解体作業が平成27年10月6日に行われたため、当日に立会を行った。その後、発掘調査は平成27年10月7日に実施した。今回の調査は、史跡金剛山における第4次調査となる。

(3) 発掘作業の経過

今次調査は、納骨堂設置部分および十三重塔仮移設部分を対象として、工事計画に合わせてトレンチを設定し、前者を1トレンチ、後者を2トレンチとした（図5）。十三重塔が建っている場所は、周囲から一段高くなり、基壇状を呈している。塔の周囲には礎石が存在し、この位置に十三重塔が設置される以前、少なくとも江戸時代末期時点には不動堂と呼ばれる建物が存在していたことから、この基壇は不動堂に伴う基壇と想定できた。そのため発掘調査にあたっては、不動堂の建立に伴う遺構等の存在に留意しながら進めることとした。

各トレンチの掘削は全て人力で行い、層直面での遺構検出に努めるとともに、土層の堆積状況について適宜写真・図面による記録を作成した。

以上のような経過をたどり、平成27年10月7日に現地での調査を全て終え、機材等の撤収を行った。

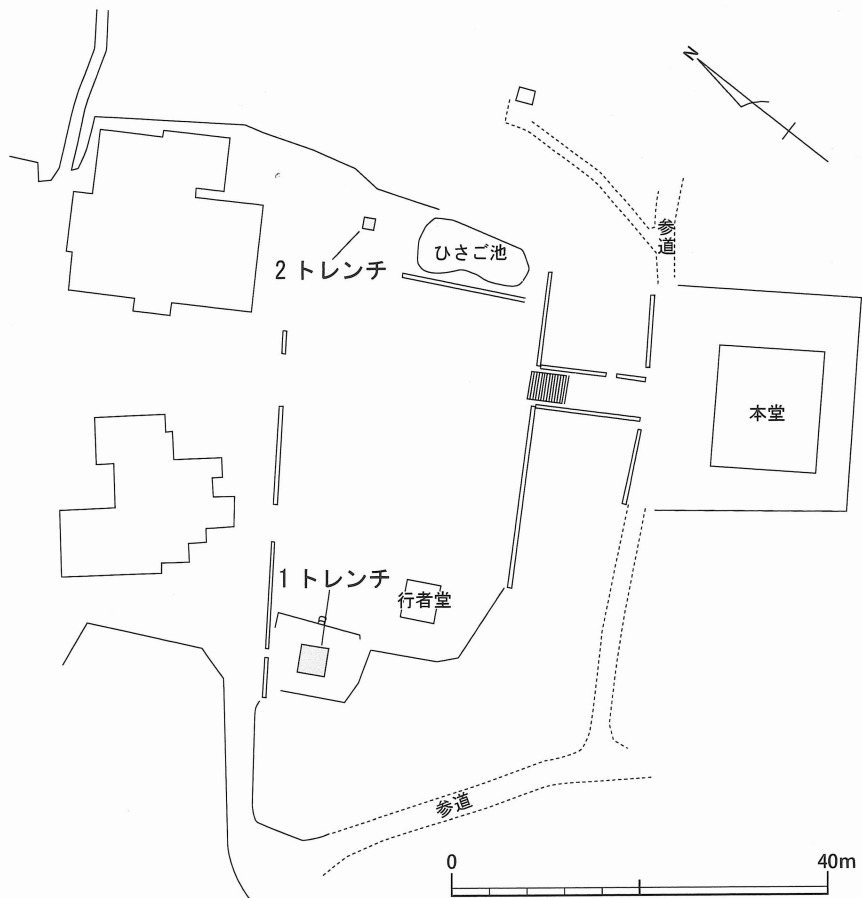


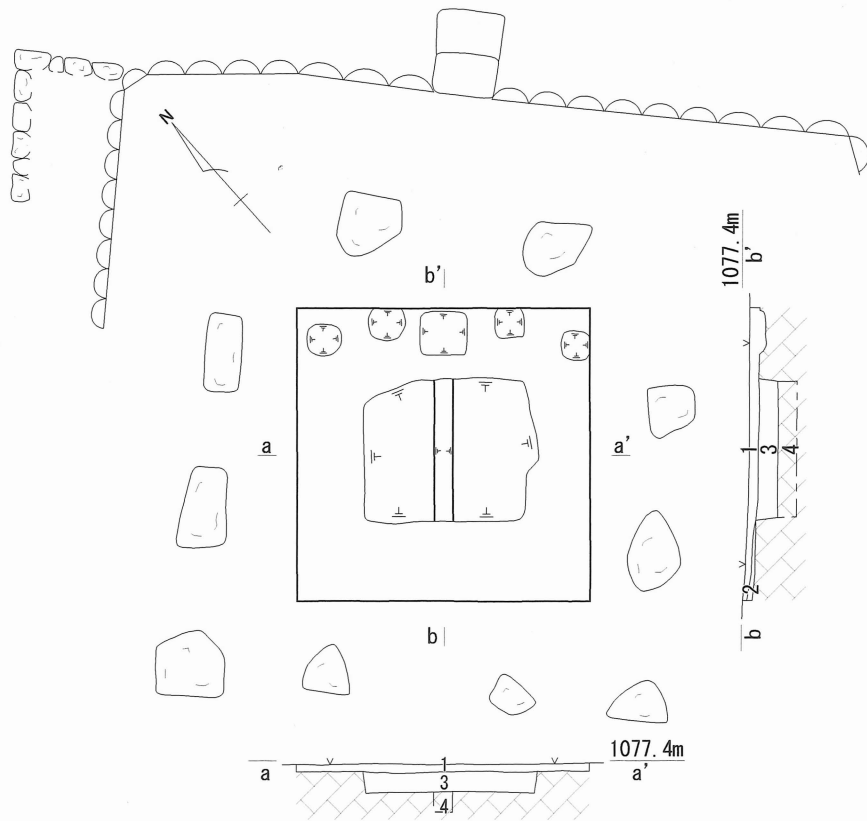
図5 トレンチ配置図

3. 各トレンチの調査成果

(1) 1トレンチ (図6)

1トレンチについては、事前の立会で、十三重塔の基礎による攪乱が調査予定範囲の中央に一辺1.2 m、深さ30cm程度で及んでいることが明らかとなった。その攪乱坑を観察すると、表土直下から地山と思われる土層が確認できた。このような状況を踏まえながら、一辺3.1 mの矩形のトレンチを設定して発掘調査を行った。掘削深度については、後述のとおり、表土直下で地山が検出されたため、最大でも50cmである。

表土を除去すると、全体に締まりの強い花崗岩の地山と思われる土層(4層)が見られ、トレンチ南西側にのみにぶい黄褐色礫混じり細砂(2層)が薄く認められた。この土層は、締まりの弱い土質から整地土のような土層とは考えにくく、調査地の南西が崖面になっていることから、崖面からの流出などによる自然堆積層と考えられる。トレンチ全面に検出した4層上には、上述した十三重塔の基礎の攪乱坑や、十三重塔前面にあった石柱等による攪乱坑があるのみで、遺構の存在する徴候は認められなかった。トレンチ中央の攪乱内において、下層確認のサブトレンチを設定し掘削



1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細礫混じり細砂
3. 明黄褐色 (10YR6/8) 中砂～極粗砂
細礫を多く含む、締まりが弱い(攪乱埋土)
4. 明黄褐色 (10YR6/8) 中砂～極粗砂
細礫を多く含む、締まりが強い(地山)

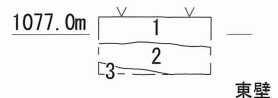
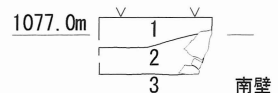


図6 1トレンチ平面図・土層断面図(礎石等の位置は略測)

を行ったが、締まりの強い4層が続いていくことが確認できたため、4層は地山と判断した。遺物は、北東辺に並んだ5つの攪乱坑のうち、中央の攪乱坑から銅銭が1点出土したのみである。

(2) 2トレンチ(図7)

60cm × 60cm の範囲で、深さ 30cm の調査を行った。表土を除去すると、黒褐色極細砂層、オリーブ褐色細砂層があり、黒褐色層には拳～人頭大の礫や近現代の陶磁器等が多く含まれていた。聞き取りを行ったところ、当地点は近年までゴミ捨場として利用されていたようであり、この層はその状況を反映したものと考えられる。オリーブ褐色層については、遺物の出土もなく、性格は不明である。狭小な面積の調査ということもあり、遺構は確認できなかった。



1. 黒褐色 (10YR3/2) 細～極細砂
2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 極細砂
拳～人頭大の礫が多く入る
3. オリーブ褐色 (2.5Y4/3)
小礫混じり細砂

図7 2トレンチ土層断面図

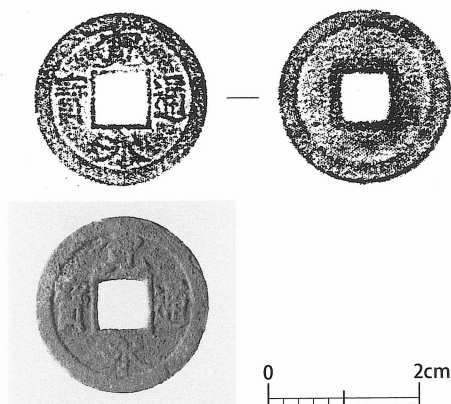


図8 寛永通寶

4. 遺物 (図8)

本発掘調査で出土した遺物は、総量でビニール袋 (38cm × 32cm) 2袋程度であり、その大半を近現代の陶磁器が占めている。ここでは、1トレンチ北東辺に並んだ攪乱坑のうち、中央の攪乱坑より出土した銅銭について報告する。

この銅銭は、江戸時代に铸造された寛永通寶である。全体に摩耗が激しく、文字面の一部には青錆が付着している。法量は、外縁外径縦 23.12mm、外縁外径横

23.15mm、外縁内径縦 19.01mm、外縁内径横 18.45mm、内郭外幅縦 8.05mm、内郭外幅横 8.17mm、内郭内幅縦 6.49mm、内郭内幅横 6.51mm、外縁厚 1.14mm、文字面厚 1.0mm、重量 2.7g である。摩耗のため文字の判読が難しいが、「寛」字は 12 画と 13 画の頭が離れ、13 画の末尾は左上方に強く跳ね、先端は鋭い。「永」字はフ画とく画の食い違いが少なく、4 画目起筆部が大きい特徴がある。「通」字はコ頭通で、「寶」字はハ貝寶である。背面に文字は認められない。法量の小ささや重量の軽さ、全体に丸みのある書体の特徴から、Ⅲ a 様式に属する可能性が高いと考えられる。(川根 2001)。

5. 総括

今次調査では、納骨堂設置部分および十三重塔仮移設部分の 2 箇所を対象に発掘調査を実施した。

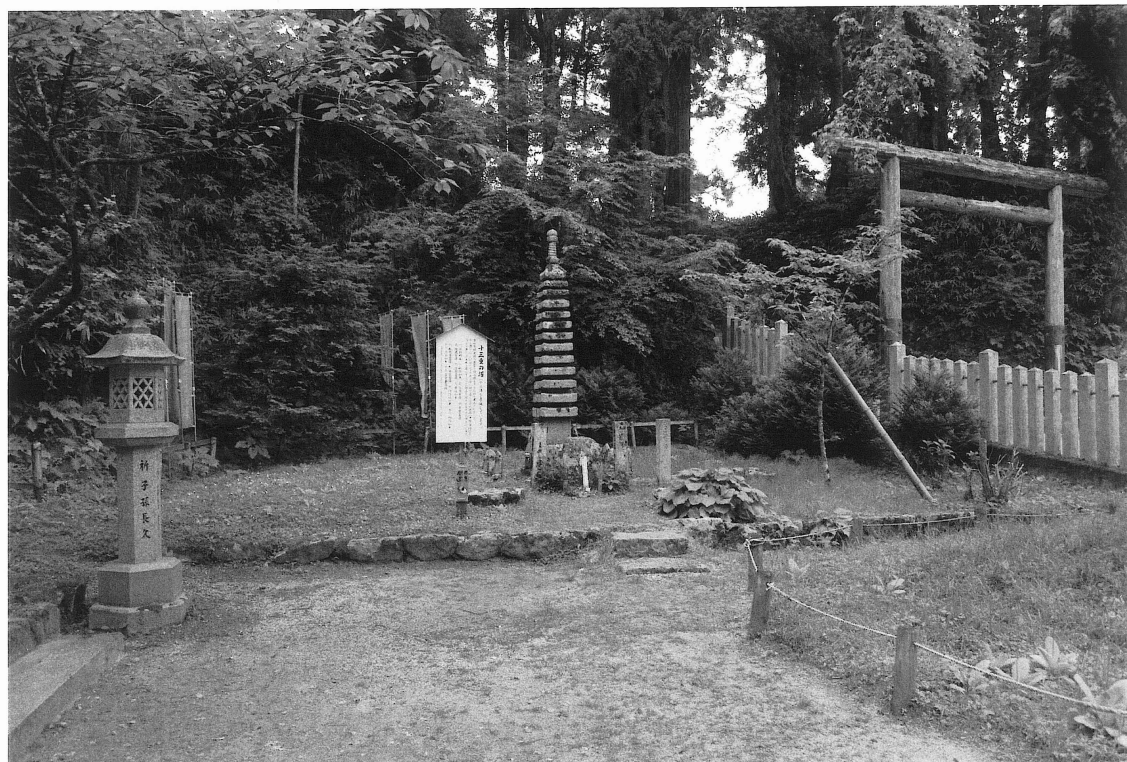
調査の結果、両トレンチともに遺構は検出されず、遺物も上述の銅銭を除けば、全て近現代のものであった。したがって、今回工事による史跡への影響は極めて軽微であるといえる。

1 トレンチでは、不動堂の基壇に伴う整地土層などが検出される可能性が考えられたが、そのような土層は確認できなかった。そのことから考えると、不動堂の基壇は盛土などを施さない、地山削り出しによって築造されたものと考えられる。今次調査の成果だけでは、この基壇がいつ頃築造されたのか明らかにしえないが、今後の課題としたい。

参考文献

- 秋山日出雄・網干善教 1959 『室大墓』 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告 第十八冊 奈良県教育委員会
 網干善教 1959 「御所市大字室 みやす古墳」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』 第十二輯 奈良県教育委員会
 網干善教 1961a 「御所市森脇吐田平古墳群」 『奈良県文化財調査報告 (埋蔵文化財編)』 第四集 奈良県教育委員会
 網干善教 1961b 「御所市古瀬「水泥蓮華文石棺古墳」及び「水泥塚穴古墳」の調査」 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』 第十四輯 奈良県教育委員会
 梅原未治 1922 「大和御所附近の遺蹟研究」 『歴史地理』 第參拾九卷 第四號 日本歴史地理學會
 近江俊秀編 1993 「鳴神遺跡—第 2 次～第 4 次調査—」 奈良県文化財調査報告書 第 66 集 奈良県立橿原考古学研究所
 岡田憲一 2011 「秋津遺跡第 4 次調査」 『奈良県遺跡調査概報 2010 年度』 第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
 岡田憲一・松岡淳平 2012 「秋津遺跡第 5 次調査」 『奈良県遺跡調査概報 2011 年』 第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所

- 岡田憲一・絹昌歩・中東洋行 2013 「秋津遺跡第6次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・中野咲 2015 「秋津遺跡第7-1次・7-2次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・木村理恵 2015 「秋津遺跡第7-3次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田雅彦編 2013 「観音寺本馬遺跡Ⅰ」奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第113冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 金澤雄太 2015 「條ウル神古墳」『大和を握る 33 - 2014年度発掘調査速報展-』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 河上邦彦 2001 「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史-一村川行弘先生頌寿記念論集-』大阪経済法科大学出版部
- 河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976 『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第31冊 奈良県教育委員会
- 河上邦彦・木下巨編 2004 『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第87冊 奈良県教育委員会
- 川根正教 2001 「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会
- 北中恭裕編 2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書 第122集 奈良県立橿原考古学研究所
- 絹昌歩 2015 「秋津遺跡第8次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 木許守 2007 『史跡金剛山Ⅰ』御所市文化財調査報告書 第32集 御所市教育委員会
- 木許守 2011 『史跡金剛山Ⅱ』御所市文化財調査報告書 第39集 御所市教育委員会
- 木許守 2015 『史跡金剛山Ⅲ』御所市文化財調査報告書 第49集 御所市教育委員会
- 木許守編 1992 『鴨都波 11次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書 第11集 御所市教育委員会
- 木許守編 1996 『室宮山古墳範囲確認調査報告』御所市文化財調査報告書 第20集 御所市教育委員会
- 木許守編 2007 『巨勢山古墳群Ⅵ』御所市文化財調査報告書 第30集 御所市教育委員会
- 木許守・西村慈子編 2015 『観音寺本馬遺跡』御所市文化財調査報告書 第48集 御所市教育委員会
- 楠本哲夫編 1978 「御所市掖上籠子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 御所市教育委員会 1989 『ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』御所市教育委員会
- 御所市教育委員会 1990 『ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』御所市教育委員会
- 御所市教育委員会 2008 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅰ』御所市文化財調査報告書 第33集 御所市教育委員会
- 御所市教育委員会 2009 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ』御所市文化財調査報告書 第35集 御所市教育委員会
- 御所市教育委員会 2010 『京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅲ』御所市文化財調査報告書 第37集 御所市教育委員会
- 御所市教育委員会編 2003 『古代葛城とヤマト政権』学生社
- 阪本晋通編 2002 『鴨都波 16次発掘調査報告』御所市文化財調査報告書 第27集 御所市教育委員会
- 佐々木健太郎 2012 「名柄遺跡 第6次 発掘調査報告」御所市文化財調査報告書 第41集 御所市教育委員会
- 佐藤小吉 1916 「権現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回 奈良縣
- 島本一 1938 「琴柱形石製品の新例」『考古學雜誌』第二十八卷 第六號 考古學會
- 十文字健編 2007 『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書 第119集 奈良県立橿原考古学研究所
- 白石太一郎 1974 「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
- 末永雅雄 1932 「南葛城郡葛城村西北窪 和田山古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會抄報』第二輯 奈良縣
- 鈴木一 議編 2014 「観音寺本馬遺跡Ⅱ」奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第114冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 関川尚功 1989 「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 高橋健自 1919 「南葛城郡名柄發掘の銅鐸及銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回 奈良縣
- 豊岡卓之 1989 「鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県教育委員会 1980 「新宮山古墳」『奈良県指定文化財-昭和54年度版-』
- 坂靖編 1996 『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第69冊 奈良県教育委員会
- 坂靖編 2000 『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第76冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信 2002 「北徑遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2001年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信 2006 「二光寺廢寺」『奈良県遺跡調査概報 2005年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信・十文字健 2005 「北徑遺跡 2004-第1次調査 伏見遺跡 2004-第1・2次調査」『奈良県遺跡調査概報 2004年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 藤田和尊 1987 「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第23号 財団法人飛鳥保存財団
- 藤田和尊 1991 「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42 (1989年度版) 日本考古学協会
- 藤田和尊編 1985 『巨勢山境谷 10号墳発掘調査報告』御所市文化財調査報告書 第4集 御所市教育委員会
- 藤田和尊編 1987 『巨勢山古墳群Ⅱ-御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査Ⅰ-』御所市文化財調査報告書 第6集 御所市教育委員会
- 藤田和尊編 1994 『橿原遺跡Ⅰ』御所市文化財調査報告書 第17集 御所市教育委員会
- 藤田和尊編 2002 『巨勢山古墳群Ⅲ』御所市文化財調査報告書 第25集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・尼子奈美枝編 1992 『鴨都波 12次 概報』御所市文化財調査報告書 第12集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 1999 『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』御所市文化財調査報告書 第24集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 2001 『鴨都波1号墳 調査概報』学生社
- 前園実知雄・関川尚功・中井公 1978 「御所市朝妻廢寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県教育委員会
- 松岡淳平 2011 「中西遺跡第16次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 松田真一 1997 『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993 「御所市高宮廢寺について」『青陵』第83号 奈良県立橿原考古学研究所
- 本村充保 2009 「観音寺本馬遺跡-京奈和自動車道(観音寺Ⅰ区)-」『奈良県遺跡調査概報 2008年』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 本村充保・中野咲 2013 「中西遺跡第18次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 米川仁一・菊井佳弥 2010 「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2009年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所



1 十三重塔撤去前（東から）



2 同（南東から）



1 1トレンチ掘削前（北東から）



2 1トレンチ全景（北東から）



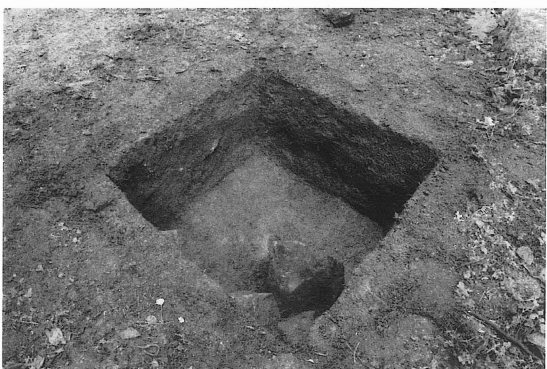
3 同（北から）



4 2トレンチ掘削前（北西から）



5 2トレンチ全景（北から）



6 同（南から）

報告書抄録

ふりがな	しせき こんごうさん IV							
書名	史跡 金剛山IV							
副書名	納骨堂設置に伴う発掘調査							
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	金澤雄太							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2277 奈良県御所市室102番地 TEL 0745-60-1608							
発行年月日	2016年1月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 金剛山	ごせし 御所市 たかま 大字高天	29208		34° 25' 11"	135° 40' 17"	20151007	9.97	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡 金剛山	城跡ほか	鎌倉以降	なし		銅銭(寛永通寶)			

奈良県御所市

史跡 金剛山 IV

— 納骨堂設置に伴う発掘調査 —

御所市文化財調査報告書 第50集

平成28年(2016年)1月29日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市室102番地

印刷 株式会社 笹田印刷所

御所市今住 16 - 3